
哀切優愛

桃華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀切優愛

【Nコード】

N9289J

【作者名】

桃華

【あらすじ】

蘭に告げる別れと灰原に伝える想い。そしてこれからの生きる道。これは私の考えたコナンの選んだ生き方です。基本的にコ哀です。新蘭しか認められない方は読むことを推奨出来ません。そして、コナンは新しい名を語ります。

第1話 蘭に告げた別れ（前書き）

はじめまして。

桃華といいます。

第1話 蘭に告げた別れ

携帯電話から着信音が聞こえてきてそれを取る。

電話相手を確認して、思わず心が飛び上がった。

電話をかけてきたのは自分、毛利蘭の幼なじみの工藤新一だった。

彼は自分たちが高二の時に突如姿を消した。

彼いわく、厄介な事件に関わっているそうだが、いい加減帰ってきてほしい。

もう、一年近くも経ったのだ。

以前はよくかかってきた電話も最近は少ない。

友達はいつまでもあんな推理の介を待たないで新しい恋を探せという。

それでも、彼は私に待っていてくれ、と自分の家に居候している少年、江戸川コナンを通して頼んできている。

だから、私は新一を待っている。

そんな新一から電話が来た。

嬉しくないハズがない。

「もしもし、新一。久しぶりだね」

「ああ、そうだな」

ウキウキとした喜びの声で出た自分とは真逆の印象を受ける新一の
声に驚いた。

「新一？どうしたの？そんなにその厄介な事件って大変なの？」

「そういう訳じゃねえけど、ああ、いや大変ちゃあ大変だな」

「もう、どっちなのよ」

困ってるような新一の声に笑う。

「ああ、ごめんごめん」

笑っていたのだけれど、浮かれていたのだけれど、何なのだろう？

酷く嫌な予感がする。

「なあ、蘭」

新一が何かを言い出そうとする。

その声の調子から、凄く緊張した様子を感じる。

「なに？」

だから、なるべく普通を装おった。

ただの杞憂であるようにと願って。

「もう待つな」

「え？」

言われたことが分からない。

それでもやっぱり、嫌な予感は続いていて、もう聞くなと頭が警報を鳴らしてきた。

「前に、待っててくれて頼んだよな。それ、取り消してくれないか？」

私を伺うようにそう言った新一の言葉を無意識に理解しないように頭が働いて、動揺する。

「何、言ってるのよ」

そんな私に新一はトドメを刺す。

「俺は蘭のことが好きだったよ」

好き、という言葉に浮かれられない。

だった。ということは過去形。

なら、今は？

「ちょっと、新一、冗談なら、怒る、わよ」

震える声をなんとか出す。

「冗談でンなこと言えねえよ」

やだ。やだやだやだ。

「なあ、蘭。聞くだけ聞いてくれ」

本当は今すぐ携帯の電源を切ってしまいたいけれど、出来ない。

新一は私の返事を聞かないで話を続ける。

「俺な、お前と幼なじみでよかったと思ってるよ。」

俺さ、小さい頃から推理小説とかにはまって、気づいたら周りとはサッカーの話しか合わなくなってるさ、蘭だけだったんだ。

ちゃんと俺の話を聞いてくれて、いつも一緒にいてくれてさ、ありがとう。

高校に入ってから、よくクラスの奴等に夫婦だってからかわれたよな。

スッげえ恥ずかしかったけど、照れてたけど嬉しかった。

蘭のことが好きだったからいつかそうなりやいいなと思ってずっと思ってた。

蘭に、待っててくれて頼んだのは自分の為なんだ。

ゼツテエにお前のところに戻るんだって、そう強く気持ちを持つた
めの自分への誓いだっただ。

そして、そんな俺の自分勝手な言葉を信じて本当に待とうとしてく
れて、感謝してる。

蘭が笑うと嬉しかった。

蘭が泣くと悲しかった。

お前に会いに行けた時は嬉しかった。

言いたいことが上手く言えなくて悔しかった。

あのマセた坊主から、お前が泣いたと聞くたびに辛かった。

蘭に会いたかったんだ」

いつの間にか出ていた涙が止まらない。

ずっと、ずっと欲しかった言葉のはずなのに。

どうして？

別れを言われているみたいだ。

「ねえ、新一。私、も新一のこと、好き、だよ」

涙で震えてうまく声が出ない。

それでも、ずっと言いたかったことを告げれた。

新一の返事は

「ごめん。好きな人が出来たんだ」

だった。

その後のことはちゃんと覚えてない。

何度もごめんって言われた気がするし、もう電話するなとも言われた気がする。

第2話 後悔はしないと決めた

工藤邸で江戸川コナンは携帯を切って変声機のスイッチを切り、溜め息をついた。

蘭、泣いてたな。

最低なことをしていると分かっている。

でも、もう限界だ。

高校生にとっての一年は長い。

心変わりだつて、する。

蘭は初恋だったんだ。

甘くて楽しくて、そんな初恋だ。

勿論今でも蘭が大切なことには変わらない。

それでも、それ以上に大切な人が今はいる。

誰かを愛するためには、誰かを犠牲にする覚悟も必要だなんて知らなかった。

「ははっ」

泣いていた蘭の声が頭の中で響く。

蘭を傷つけたことよりも、けっこう辛いことよりも、そのことにあまり動揺はしていないらしい自分を自嘲した乾いた笑いが出てきて、嫌になる。

「本当にこれで良かったんか？」

声のした方に振り返ると西の高校生探偵服部平次がいた。

「いーんだよ」

「後悔しないんやな」

俺の覚悟を確認するために聞いてくる服部に即答する。

「ああ」

自分で決めたことだ。

迷い苦しみそして出した答え。

ただ、言いたいことがあるならば、本来なら服部は関係ないのだから、

「服部、巻き込んでごめんな。何なら、お前は今からでも」

抜けられるんだぞ。

その言葉は最後まで言わせてもらえなかった。

「おいおい。何今更なこと言つとるんや。俺らは親友、やろ？」

少し怒った風な服部に遮られたのだ。

「そうだったな。サンキュー」

本当に服部が居てくれて良かった。

こんな俺を支えてありがとうな。

明日を最後に『江戸川コナン』は米花町から居なくなる。

だいたい三週間後までに『工藤新一』は死んだことになる。

事の始まりは一年ほど昔のことだ。

好奇心で見てしまった取引の口止めに薬殺されそうになった。

運がいいのか死ななかったが変わりに姿が縮んだ。

聞かれて咄嗟に答えた偽名、江戸川コナンとして過ごしながら元の姿に戻るために自分の体を小さくした黒づくめの組織を調べた。

灰原哀と名乗る俺と同じく小さくなってしまった少女は幼児化した原因であるアポトキシン4869の開発者であり、今は俺の相棒だ。

調査を進めていく内に仲間になったFBI。

殺された振りをして、沖屋昂という人物に成りきり、バーボンというコードネームで組織に潜入捜査してくれた赤井秀一さんのお陰で先月ようやくアポトキシン4869の成分が分かった。

ただ、その後俺の為に必死になって研究を続けてくれた灰原が言うには、もう俺も彼女も完全に元に戻ることは出来ないらしい。

如何せん、毒に蝕まれた時間が長過ぎるそうだ。

それでも、毎日三回、数を増やしながらでも飲み続ければ三週間くらいは元に戻る解毒剤を作りあげてくれた。

もう、完全に元に戻ることはないと告げた時、確かにショックだったけれどそれほどではなかった。

何でかと自問自答して、出た答えは簡単だった。

俺が工藤新一に戻りたかったのは、もう一度蘭の隣に立ちたかったから。

そして今、俺と一緒に生きたいのは灰原哀。

運命共同体である彼女と過ごす内に、それが当然になっていた。

彼女を守りたいと強く願うようになっていた。

いつまでも一緒に居たいと思うようになっていた。

そして気付いた。

蘭が泣くたびに辛かったのは罪悪感からだっただと。

それまでいつも一緒に居た大切な幼なじみの蘭は俺の初恋だったんだと。

組織との決戦は三日後。

一時的とはいえ俺が工藤新一に、灰原が宮野志保に戻るのは二日後。

お互いに自分の本来の姿で決着をつけたいんだ。

そして、その前に蘭にもケジメをつけたかった。

一方的で最悪だと分かっていた。

それでも。

灰原に気持ちを伝えたい。

迷惑かもしれないけど、もし自分が死んだとしても、後悔をしたくないから。

第2話 後悔はしないと決めた（後書き）

新一のごめんにはどんな意味が込められていると感じましたか？

心の籠らないただ言っだけの謝罪？

そんな訳ないと私は思います。

本当のことを伝える気が無くてごめん。

騙していて、そしてこれから更に騙すからごめん。

いないフリしてコナンとして近づいてごめん。

待ってくれてごめん。

待たせたのに君の元に戻る気がなくなっていることに対してごめん。

コナンとして近づいて君の気持ちを知っているのに、それを切り捨てることにごめん。

そして、ありがとう。

たぶん、この他にも声にしないたくさんことが詰まった、ごめん、です。

コ哀を書こうと思って、まず問題なのは新一と蘭との関係だと思いました。

だから敢えて別れのシーンからのスタートです。

それからあらかじめ伝えます。

本文の中に組織との決戦は3後日とありましたが、決戦の前後だけで決戦そのまのは書けません。

どうしても想像が出来ないからです。

なんていうか、人同士の繋がりとかを書いていきたいなと思います。

第3話 ふざける朝の一風景

「ほれ。お食べ」

「俺は犬かい！」

「いいじゃねーか。別に」

「良くないわ」

朝、テーブルにトーストとサラダを並べながらコナンは服部とふざけていた。

「飲み物は何がいい？つーか、珈琲でいいか？」

「おう。構わへんで」

「了解」

コナンはもう一度キッチンに向かって、珈琲を淹れて戻ってくる。

珈琲を淹れたカップを服部の前と自分の席に置いて椅子に座る。

「もし、不味いっつったら許さねーぞ」

「不味い」

「おい！飲む前に決めつけんな！てか美味いから。自信あるから。飲んでみろよ」

そう言つて、自分も口を着ける。

「何やこれ。めっちゃ旨いで」

凄く驚いたように珈琲を凝視している服部をジトーと見る。

「何でそんなに驚いてんだよ」

「そやかて工藤で小学生」

「それは見た目だろ。昔、親父に教え込まれたんだよ」

「そういや昨日の飯も美味しかったしのお。スゴいやないか」

「一人暮らしが長かったからな」

「意外や。工藤なら事件事件で外食とインスタントしか食べとらんて思つてたわ」

「まさか、食べ盛りの高校生がそんなじゃもの足りねえだろ」

「まあ、そやな」

パクパクと朝食を食べて食器を流しに置く。

「皿洗いは頼んだからな」

「まかしときい」

「んじゃ、俺は学校行くから」

「ちょい待ちいな」

ランドセルを背負って玄関に向かおうとすると、服部に呼び止められた。

振り返って、訊ねる。

「何かあんのか？」

すると、服部はさっきまでの軽い雰囲気は何処かへやって、真剣な眼差しで俺を見ていた。

「お前、なんか無理してへん？」

「へ？どういう意味だ？」

「昨日の夜、つつか毛利のねーちゃんに電話した後な、だいぶ辛そうやったやんか」

そうか。服部は心配してくれていたのか。

「平気だよ。自分でも驚くぐらいにな。それに、今辛いのはきつと蘭だろ。俺はそのくらいで気持ち揺らぐ程の軽い気持ちじゃねえからな」

何とも思っていない訳じゃないけれど、うだうだしたって仕方がない。

その意思を伝えると服部は笑ってこう言った。

「そか。よし、なら江戸川コナンとしての最後の学校楽しんで来
んやでえ」

「おつ」

工藤邸から出るとタイミング良く、灰原も阿笠博士の家から出てき
た。

こんなささやかな偶然の一致で嬉しくなるのは単純だろうか。

「よお、灰原」

「おはよう。工藤君。迎えにいく手間が省けて良かったわ」

自然に横に並んで元太たちとの待ち合わせの場所に向かって歩く。

灰原は俺が蘭をふったことも、工藤新一だと告げる気がないことも、
知らない。

自分が覚悟を決めるまで伝えたくなかったからだ。

「今日の放課後、俺ん家に来てくんねーか？」

「どうして？」

「話したいことがあるんだ」

「いいわ。明日からのこともあるしね」

不思議そうにしていたが灰原は了承してくれた。

第3話 ふざける朝の一風景（後書き）

このお話は平次とコナンのコントのような会話を書いてみたかったです。

深読みする人がいれば、コナンは空元気を出しているように感じられたかもしれないな、なんて思っ（期待して）ます。

まあ、でも実際そこまで落ち込んでるわけでもないですよ。

だってコナンは蘭を傷つけることの覚悟は出来ていたんですから。

第4話 ごめんなさいとありがとう

小学校は完璧と言えるほどにいつも通りだった。

江戸川コナンが転校するということは灰原以外に、先生すらまだ知らない。

最も、名を変えてまた通うつもりだ。

明日から二週間くらい学校を休むということは博士を通じて伝えた。

歩美、元太、光彦には帰り道に伝えた。

一年ぶりに外国にいる両親に会いに行く、と。

「で、何なのかしら？話って」

工藤邸に着いてすぐに灰原が口を開いた。

「あ、ああ、うん。とりあえず、何か飲まねえか」

答えようとして、少しもってしまった。

今更緊張とか情けないな。

珈琲を用意しようとキッチンへ向かう途中小さく声が聞こえた気がして振り返る。

「何か言ったか？」

灰原を見ると軽く震えていてギョツとする。

「お、おいどうし」

「ごめんなさい」

心配の声をかけようとしたら遮られて謝られる。

謝られるようなことなんてあったか？

「貴方をそんな姿にしまつて、戻してあげられなくて、ごめんなさい」

いつもよりも更に小さく見える灰原の様子と言葉に、ああ、と納得する。

「謝る必要なんてねーぞ。お前が悪いっつー訳じゃねえんだから」

「私が悪くない？そんなはずないじゃない」

灰原は自分をよく必要以上に責める。

だからこそこれ以上少なくとも俺にだけでも負い目を持って欲しくない。

そう思ったのだけれど、逆効果だったようだ。

「私が、アポトキシン4869なんて作らなければ貴方は蘭さんと引き裂かれなかったのよ。私のせいで沢山の命が失われたのよ！私が、いなければ！」

もうすぐ組織を潰せるのだということに、灰原の心は緊張状態にあったのかもしれない。

あまりの悲痛な言葉と内容に気づいたら灰原を抱きしめていた。

「えっ、ちよっ、何するのよ」

慌てて俺から離れようとする体を強く抑え込む。

「俺は、お前がない方がいいなんて思っちゃいねーよ」

「な、何を……」

抵抗を忘れている灰原に言い聞かせるように言う。

「良いか。よく聞け。お前は悪くない。毒を作ってたんじゃないんだろ。俺なんかは自業自得、だろ」

「でも、私があの薬を作らなかったら」

「俺は死んでたよ。拳銃が何かで一発。お陀仏だな。お前のお陰で俺は今生きてるんだよ。初めて会った時にお前を責めたのはただの八つ当たりだ。悪かった」

言葉を出せない灰原にありったけの感謝を伝える。

「それからありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9289j/>

哀切優愛

2010年10月8日22時15分発行